様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年６月１９日現在

機関番号：55301
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011 年度～2012 年度
課題番号：23700765
研究課題名（和文）　学校運動部活動が子どもにもたらす「社会性」の質的構造に関する探索的研究

研究課題名（英文）　Exploratory study on the qualitative structure of ‘sociality’ which extracurricular activities brings to children.

研究代表者
山本　浩二（KOJI　YAMAMOTO）
津山工業高等専門学校　一般科目（保健体育）准教授
研究者番号：50560447

研究成果の概要（和文）：高等学校期における学校運動部活動は、子どもたちの社会性獲得・形成にいかなる影響力を有しているのか、またその教育的効果に関して実証的に検討していくことを目的とした。対象は、高校生 5,434 名とし、質問紙調査を実施した。4 因子 16 項目から構成される「高校生版社会性測定尺度」を用いて社会性得点を算出した後、「性別」「学年」「部活動参加状況」間で比較・検討した。まず、「性別」に関しては、獲得している社会性は男性よりも女性の方が高い傾向を示した。「学年」に関しては、4 項目中 3 項目で 3 年生が最も高い値を示し、有意差も確認できた。「部活動参加状況」に関しては、「運動部」や「学外（運動）クラブ」所属者が高い値を示し、「所属なし」の生徒がすべての項目で最も低い値を示した。また、学校行事への参加意欲に関しては、学校部活動（運動部・文化部）所属者が非所属者よりもすべての項目で高い値を示していることから、ここに学校部活動の教育的有効性（効果）を確認できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to consider the contemporary meaning and the effectiveness of participating in extracurricular activities in senior high schools. Consequently, the effectiveness of extracurricular activities and the relation between sociality and extracurricular activities were confirmed.　In addition, the participants in extracurricular activities are more eager than the non-participants in any activity at school. The increase in the number of students who take part in extracurricular activities leads to the revitalization of the school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：複合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　スポーツ科学　スポーツ社会学
キーワード：社会性，学校運動部活動，高校生

１．研究開始当初の背景

今日，学校運動部活動（以下，部活動）については，多くの議論がなされ，それは部活動を学校から地域社会へ委嘱すべきだという主張が多くを占めている．その背景には，近年の少子化問題の影響はもちろん，社会の変化に伴った部活動を取り巻く環境の変化が要因となっている．

しかしながら，拙稿をはじめとした各種部活動研究は，部活動の（教育的）有効性を数量的アプローチによってのみ解明しようとされており，その背景に存在するであろう，“競技種目特性”，“顧問教師との関係性”，“部内での出来事”，“競技成績”，といった部活動における各種事柄と子どもの社会性獲得の有機的関連性についての質的アプローチには至っていない．

本研究における「部活動と社会性」に関する検討作業は，以下のオリジナル性を有している．すなわち，「部活動運営形態と生徒たちの『社会性』獲得状況の関連性」という，スポーツ的環境要素を考慮した横断的研究視点と，「部活動によって獲得される『社会性』の持続性」を検討する縦断的研究視点の採用，とが併存している点にある．

２．研究の目的

本研究では，部活動が子どもにもたらす教育的効果のなかでも，特に「社会性」に焦点化し，その質的構造の把握理解を目的とする．研究期間内に明らかにする具体的内容は下記の通りである．

1）探索的質問紙調査法による「スポーツ的社会性」構造の解明．

2）部活動参加者（生徒）の「スポーツ的社会性」獲得に関連する各種要因（対人関係，部活動運営形態等）の検討．

３．研究の方法

(1) 調査方法

０県を主体とし，Ｉ県，０県の高等学校（7校）の生徒 5,434 名を対象に質問紙調査を実施した。調査実施者から各学校に対して協力を要請し，HR の時間帯に配布・回収を願っている．

回収されたデータ数は全対象数である 5,434 部であったが，分析対象者は，欠損回答が皆無の 5,112 部（有効回答率 94.1%）となった．調査時期は 2012 年 7 月～10 月である．

(2) 調査項目

本研究の主となる「社会性」を測定する尺度として，平成 23 年度に作成した「高校生版社会性測定尺度」を用いることとした．モデルの適合度指標となる，GFI と AGFI においては，すべての因子で十分に高い値が得られていること，また，値が 1 に近いほど良いモデルとされる CFI においては，すべての因子で 1.00 を示していることや，値が 0 に近いほど良いモデルとされる RMSEA においても，すべての因子で.000 を示していることから，非常に高い適合度であると考えられる．

また，学校行事に対する参加意欲について訊ねる 5 項目を設定し，それぞれ「1 大変感じている」～「4 まったく感じていない」の 4 件法により回答を求めた．その他，「基本的属性に関すること」，「クラブ活動に関すること」，「過去の体験に関すること」，「自分自身に関する意識に関すること」についても訊ねている．

４．研究成果

(1) 高校生版社会性測定尺度の作成

アンケート調査に入る前に，今日の高校生の社会性を把捉すべく，「高校生版社会性測定尺度」の作成を行なった．手順としては，探索的因子分析により得られた 4 因子 27 項

目の因子１つ１つに対し，１因子解のステップワイズ因子分析を行った．これは，因子分析モデルに不適切な項目を統計的に同定する手法である．十分な内的整合性および適合性が得られるように項目を削除することとした．その際，内田ら（2004）の精選方法を参考にし，最終的に１因子につき４項目，計16項目を選択することとした[12]．また，因子分析モデルに不適切な項目を削除し，因子ごとに適合度指標とα係数を算出した．

モデルの適合度指標となる，GFI と AGFI においては，すべての因子で十分に高い値が得られ，許容できる範囲であると判断した．また，値が１に近いほど良いモデルとされる CFI においては，すべての因子で 1.00 を示していることや，値が０に近いほど良いモデルとされる RMSEA においても，すべての因子で.000 を示していることから，非常に高い適合度が確認できた．

さらに，ステップワイズ因子分析によって採択された 16 項目の尺度全体の因子分析モデルの適合度は，GFI=.931，AGFI=.908，CFI=.937，RMSEA=.054 を示し，尺度の因子構造の妥当性が確認された．最終的に，4 因子計 16 項目からなる高校生版社会性測定尺度が作成された（表 1）．

表1 高校生版社会性測定尺度

項　目	因子負荷量
意思表示（α＝.80）	
1　人前で大きな声で、はっきりとした口調で話すことができる	.71
23 何事も自ら積極的に行うほうである	.71
48 性別や年代に関係なく、一緒に話をすることができる	.67
56 自分には、まわりを励ましたり、元気づけたりする明るさがある	.67
Fit index：GFI＝.997　AGFI＝.985　CFI＝1.00　RMSEA=.000	
目標遂行（α＝.74）	
11 自分の立てた目標を目指して行動することができる	.65
41 物事を実行する目的を明確にしている	.65
24 自分の目標が、何を、いつまでに、どれだけ達成するのかわかっている	.60
35 自分のやりたいこと(職業)を意識して、進路設計している	.56
Fit index：GFI＝.997　AGFI＝.987　CFI＝1.00　RMSEA=.000	
対人関係（α＝.72）	
12 仲間と意見交換し、協力することができる	.65
4　他人が困っているときは、助けてあげたいと思う	.62
16 他人の良いところは自分にも取り入れたいと思う	.58
33 助言をしてくれる人たちを持っている	.55
Fit index：GFI＝.997　AGFI＝.985　CFI＝1.00　RMSEA=.000	
創意工夫（α＝.73）	
27 他人の批判を受け入れ、自分の改善に取り入れる	.68
39 多少気の合わない相手でも、協力して物事を行える	.60
52 別の方法はないかとあらゆる可能性を探ろうとする	.59
20 なるべくまねではなく、創意工夫したい	.59
Fit index：GFI＝.996　AGFI＝.980　CFI＝1.00　RMSEA=.000	

（2）分析方法

4 因子 16 項目で構成された社会性測定得点との関連性を把捉するため，一要因の分散分析を行なった．社会性獲得との関連性を検証する項目としては，「性別」「学年」「部活動（クラブ活動）参加状況」の３項目とする．また，同様に，学校諸活動に対する参加意欲との関連性に関しても一要因分散分析を行なった．

（3）アンケート調査結果

①性別と社会性得点との関連性

まず，性別における社会性得点の比較・検討を行なった（図 1）．4 項目中 3 項目において，女性のほうが高い値を示しており，その中でも，「対人関係」，「創意工夫」においては有意差も確認できる．このようなことから，高等学校期における生徒が獲得している社会性は，全体的に男性よりも女性の方が高いということができよう．しかしながらこのことは，中学校期，さらには小学校期に遡って測定してみることが課題であり，縦断的な調査を施すことで，「性別と社会性の関連性」がみえてくるのではないだろうか．

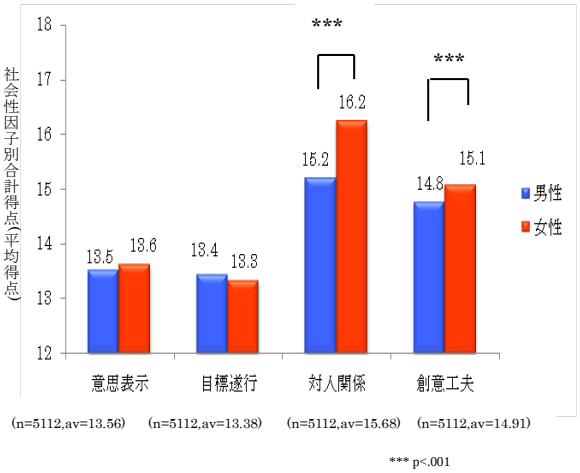


図１　性別と社会性得点

②学年と社会性得点との関連性

学年間における社会性得点の比較・検討を行なった（図 2）．4 項目中 3 項目において，3 年生が最も高い値を示しており，「意思表示」「目標遂行」に関しては，有意に高いことが明らかとなった．

このことは，高校生活を 3 年間送ることで，あるいは 3 年間のさまざまな経験で社会性を獲得できたのではないだろうか．

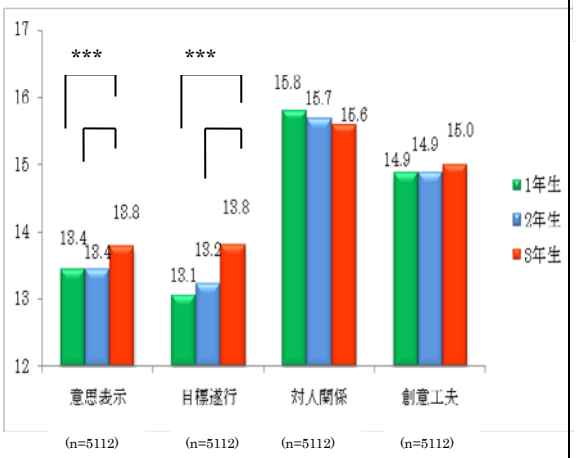


図２　学年と社会性得点　　*** p<.001

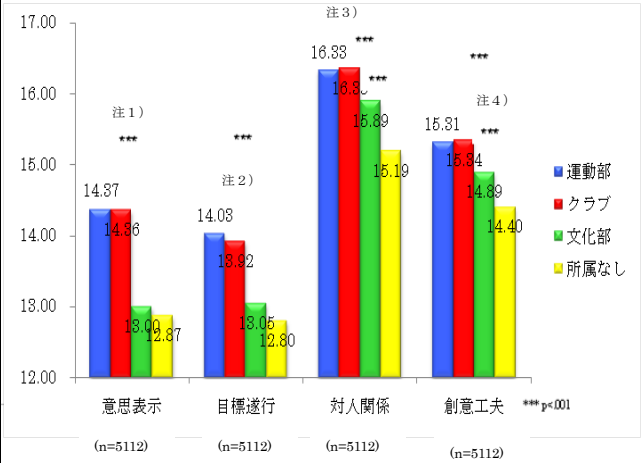
③部活動（クラブ活動）参加状況と社会性得点との関連性

部活動（クラブ活動）参加状況と社会性得点の比較・検討を行なった（図 3）．

まず，明確に言えることは，「部活動に所属していない生徒は獲得している社会性が最も低い」ということである．すべての項目において，有意差も確認でき，最も低い得点となった．

このことは，部活動（クラブ活動）の有効性の一端を把捉できたと感じている．すなわち，運動部，クラブ，文化部に限らず，所属し，活動することは，所属していない生徒より，高い社会性を獲得できるということがわかる．

また，学校部活動に限って言えば，すべての項目で，文化部より運動部の方が高い社会性を獲得していることが明らかとなった．



注１）運動＞文化・所属なし，クラブ＞文化・所属なし　*** p<. 001

部×ク＞文・所属なし　** p<. 01

注２）運動＞文化・所属なし　*** p<. 001

クラブ・部×ク＞所属なし　* p<. 05

注３）運動＞文化・所属なし，クラブ・文化＞所属なし　*** p<. 001

クラブ＞部×ク・文化　* p<. 05

注４）運動＞文化・所属なし，クラブ・文化＞所属なし　*** p<. 001

クラブ＞部×ク・文化　** p<. 01

図３　部活動参加状況と社会性得点

④部活動参加状況にみる学校諸活動との関連性

「学校行事に対するあなたの意識についてお聞かせください」という問いに対し，「4.

大変感じている」～「1．まったく感じていない」の4件法で回答を得ている．学校行事は，「体育大会」，「文化祭」，「校内清掃」，「定期考査」，「勉強の成績」に関する 5 項目で，ここでは，それぞれの項目と部活動（クラブ活動）参加状況において差異の検討を行なった．

その結果，ほとんどの項目で，「運動部」が最も高い得点を示した．体育大会のような運動を主とする学校行事に限らず，校内清掃や定期考査に対しても参加意欲が高いことが明らかとなった．すべての項目において，部活動所属していない生徒が最も低い値を示しており，有意差も確認できることから，ここに部活動・クラブ活動の有効性を見ることができる．

（4）考察

本調査研究は，学校運動部活動が高校生の社会性形成・獲得にいかなる影響力を有しているのかということを明らかにすべく，文部科学省科学研究費補助金（若手研究Ｂ課題番号 23700765：代表者　山本浩二）をいただき，標記調査研究を実施することとなった．

思春期後期にある高校生の社会性獲得状況と運動部活動への参加状況間にいかなる関連性が存在するのかを解明する目的から，0県を主体とし，Ｉ県，0県の高校生を対象とした意識調査を実施した（平成 24 年 7 月～10 月）．また，分析作業としては，筆者らの先行研究により開発された「高校生版社会性測定尺度」から得られた社会性得点との比較・検討作業を中心に行なった．まず，「性別」「学年」「部活動（クラブ活動）参加状況」と「社会性得点」との関連性を検証した．

「性別」においては，4 項目中 3 項目女性の方が高く，そのうち「対人関係因子」と「創意工夫因子」では有意差も確認できた．このことは，今回対象となった年齢層も影響していることが考えられる．すなわち，男女間に身体的成長の差異が見られるように，社会性獲得時期にも男女間で差異があるのではないだろうか．今後，対象者の年齢層を考慮し，再度調査する必要がある．

「学年」においては，4 項目中 3 項目 3 年生が最も高い値を示しており，特に「意思表示因子」と「目標遂行因子」においては有意差も確認できた．このことは，3 年間の学校生活，あるいは 3 年間の経験が社会性獲得に影響していると考えられる．また，筆者らの先行研究においても，「社会性項目の得点は，部活動所属，非所属に関わらず 3 年生が高い．また，社会性因子別に見ていくと，「3 年生の部活動所属者」がすべてにおいて最高得点である．」という結果もあることから，本調査の結果もほぼ同様の結果が得られたと言えよう．

「部活動（クラブ活動）参加状況」においては，「部活動に所属していない生徒は獲得している社会性が最も低い」ということが明らかとなった．すべての項目において，有意差も確認でき，最も低い得点であった．このことは，部活動（クラブ活動）を行なっていない生徒の社会性が低いというよりも，部活動（クラブ活動）を行なっている方がより高い社会性を獲得できると言うべきであろう．すなわち，部活動（クラブ活動）は社会性を高める一要因であることから，部活動（クラブ活動）の有効性，ひいてはスポーツ活動の有効性の一端を把捉できたと感じている．

次に，「部活動参加状況にみる学校諸活動との関連性」においては，特に「運動部」の参加意欲の高さが際立った．運動部と同様に高い社会性得点を示したクラブ活動は，学校諸活動に対して高い参加意欲を示しているとは言い難い結果となった．また，運動部と同様に文化部も学校行事に対して高い参加

意欲を示していることも注目すべき点である．特に，「定期考査への関わり」や「勉強の成績をあげたい」という項目に関しては，部活動に所属していない生徒より，有意に高いことがわかる．

以上に鑑みただけでも，運動部，文化部，クラブに参加することの教育的意義とその効果を把捉することができる．社会性獲得に関しては，スポーツ活動を伴う運動部活動やクラブ活動に所属するほうが有意に高い結果となったが，学校諸活動に関する参加意欲を見れば，三者間に有意な差は見られないものの，学校部活動所属者がすべての項目で最も高い値を示した．これは学校部活動が生徒の積極的態度形成―学校という「社会」への対応力といった意味合い―に対する有効性を確認できよう．

本研究では，今日の高校生を対象に社会性獲得状況と，学校諸活動への参加意欲の把捉理解に努めてきたが，高等学校期の子どもたちにとって必要なことは，学校内外に限らず，部活動（クラブ活動）に所属し，活動することであり，そこでの経験・体験が彼らにとって多大な教育的効果をもたらしていると言うことができる．

少子化の影響を受け，学校部活動の運営が困難となった今日，彼らの活動の「場」の確保，地域との共生，高体連などの学校対抗競技の見直しなど，われわれ「大人」がやるべき制度的な面の変革・改革も重要だが，　本研究でも一部垣間見ることとなった，部活動（クラブ活動）が子どもにもたらす影響，すなわち，部活動（クラブ活動）のどの場面，どのような事柄が社会性を高めるのか，どのような教育的有効性をもたらすのか，その質的構造（ダイナミズム）を検討する必要がある．さらに，その獲得した社会性がどこで，どのように発揮されていくのか，縦断的な研究も必要であろう．それらを踏まえ，スポーツ的，もしくは部活動的社会性構築の今日的体系化を行っていきたい．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
（1）山本浩二、内田若希、山﨑将幸：高校生における社会性測定尺度の開発と部活動および学年間による差異の検討、岡山体育学研究（査読有り）、第 20 号、2013.2、pp11 - 16
〔学会発表〕（計１件）
（１）山本浩二：高校生における社会性測定尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、九州体育・スポーツ心理学会、2012.3.11、九州大学

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　浩二（KOJI　YAMAMOTO）
津山工業高等専門学校・一般科目・准教授
研究者番号：50560447

(2)連携研究者
谷口　勇一（YUICHI　TANIGUCHI）
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：50279296

内田　若希（WAKAKI　UCHIDA）
九州大学大学院・人間環境学研究院・講師
研究者番号：30458111